

次々侵入する新たな外来種：近年の岐阜県の現状

向井貴彦（岐阜大学地域科学部）

岐阜県は中部地方の内陸県であり、県南部に濃尾平野が広がり、県中央部から北部は山地となっている。濃尾平野の海拔は低く、河口堰の無い揖斐川や木曾川は県内まで感潮域が達しているため、汽水魚等も分布している。2019年までに岐阜県内の魚類相を整理した結果、在来73種、外来40種の計113種が野外で採集もしくは撮影されていることが確認された。

その後も調査および情報収集を継続した結果、2024年まで新たに2種の外来魚（チョウセンブナ、ロングイヤーサンフィッシュ）の定着が確認された。また、SNSでの情報として、チュウガタスジシマドジョウ、トンキントゲタナゴ、オスカーの野外での採集が確認された。これら3種のうち、チュウガタスジシマドジョウについては標本を譲り受け、mtDNAの部分塩基配列についてもチュウガタスジシマドジョウであることが確認された。

こうした魚類の外来種の侵入のみならず、2023年に岐阜市でチュウゴクスジエビの侵入を確認した。チュウゴクスジエビは2019年度の河川水辺の国勢調査においても揖斐川の2地点から報告されていたが、発表者らが過去に行った岐阜市における調査時の写真を確認したところ、2012年にはすでに岐阜市にチュウゴクスジエビが侵入していたと考えられた。

さらに、両生類においても、2023年に大垣北高校自然科学部の調査によって下呂市の木曾川水系の河川にチュウゴクオオサンショウウオ（以下チュウゴク）とオオサンショウウオ（以下オオ）の交雑個体が多数生息することが確認された。チュウゴクとオオで対立遺伝子が置換しているマイクロサテライト5遺伝子座の遺伝子型を広島大学オオサンショウウオ保全対策プロジェクト研究センターによって判定してもらった結果、純系のチュウゴクやF1雑種と考えられる遺伝子型の個体は見つからず、他地域で交雑した個体が持ち込まれたものと考えられた。

こうした近年確認された外来種の侵入のうち、ロングイヤーサンフィッシュは毎年詳細な魚類モニタリング調査が行われているダム湖における定着であり、2022年まではモニタリング調査で全く発見されてこなかったことから、近年の放流によるものであると考えられる。チュウゴクスジエビや交雑オオサンショウウオの侵入については、いつごろまで遡るのかは不明だが、分布の拡大状況を早急に解明する必要がある。